

戦後東アジアをめぐる帰還移民のライフヒストリー： 山崎論文と竹田論文へのコメント

佐藤 量

本稿は、2020年度立命館大学国際言語文化研究所リレー講座「戦後東アジアをめぐる移動と生活史」における山崎哲氏（日本学術振興会・一橋大学）および竹田馨氏（日本学術振興会・京都大学）の報告に対し、佐藤によるコメントをまとめたものである。山崎氏・竹田氏の研究は、個人史、家族史のミクロレベルの視点から中国帰国者と在日コリアンの移動を分析する点に特徴があり、とりわけ当事者への聞き取りに基づいて日本と中国、韓国、北朝鮮をめぐる親族ネットワークや記憶継承のあり方を検討した手法は極めて独創的である。本稿では、両氏の報告の中で示された二つの論点について言及したい。

一つ目は、戦争、植民地の歴史が現在と地続きであるという点である。山崎氏の報告の中に「遅れてきた引揚者」という表現があった。これは特徴的で示唆的な表現である。通常「引揚者」というのは、敗戦直後に満洲など外地から帰ってきた人々を指す。その数は民間人、軍人合わせて650万人とも言われている。この人々の移動経験は、強制移動に近いものであり、過酷な逃避行など辛く苦しい歴史として知られている。

しかし、山崎氏が指摘する「遅れてきた引揚者」のように、さまざまな事情で敗戦直後に引揚げられずに、または自ら引揚げずに中国にとどまり1972年以降に帰ってきた人々は、一般的には「引揚者」ではなく「中国帰国者」と呼ばれてきた。他にも、モンゴルやシベリアに抑留された「抑留者」、医師や技術者として残留した「留用者」など、戦後しばらく帰ってくることができなかった人々を指す呼称はいくつかあるが、こうした人々もまた戦争や植民地の歴史と密接に関係しているにもかかわらず、そのつながりは十分に知られていない。

「中国帰国者」を「引揚者」として捉え直した時、戦争や植民地の歴史から切り離されてきた人々の存在に気づく。このような戦後日本社会と満洲や植民地の断絶は、竹内好が端的に指摘しているように「日本国家は満洲国の葬式を出していない。口をぬぐって知らん顔をしている。これは歴史および理性に対する背信行為だ」という言葉にも現れているだろう。山崎氏の報告から、中国帰国者の歴史も戦争や植民地の経験と地続きであることが確認できる。

竹田氏の報告に登場した北朝鮮に「帰国」した人々もまた、日本からの「引揚者」と言えよう。もっとも、日本生まれの在日コリアンにとっては、北朝鮮は自身のルーツとしての「祖国」ではあるものの、果たして「帰国」であったのかという問題はある。これは満洲からの日本人引揚者にも見られる現象で、自らの意思で海を渡った一世にとって「引揚げ」は「帰国」と同義であっても、現地で生まれ育った二世世代にとってはそれほど単純ではなく、中には引揚げによって初めて「祖国」を訪れる引揚者も少なくなかった。こうした移動する主体と世代の問題については両氏とも意識的であり、「祖国」と「故郷」をめぐる記憶やアイデンティティ形成をめぐる諸問題は重要な論点である。

両氏の報告を通して、これまで個別に語られる傾向にあった中国帰国者や在日コリアンの移動経験が、いずれも戦争や帝国の歴史に端を発するポストコロニアルな移動であるという共通性が確認された。さらに、敗戦を契機とした人々の移動経験を日本人の歴史に限定して捉えることなく、東アジア全域で発生した帰還移民の歴史として捉えることの重要性を示している。

二つ目は、「記憶」「継承」というキーワードについてである。山崎氏は、中国帰国者の記憶と継承は「マスメディアがほぼ担ってきたといっても過言ではない」と指摘した。それは、言い換えれば報道されなくなったら加率的に忘れ去られることを物語っている。2000年代以降がまさにその状況であり、報道件数の減少とともに、世間一般だけでなく中国帰国者の家庭においても記憶の風化は進んでいるという指摘には驚いた。その背景には世代間の言語ギャップや中国残留経験のトラウマなど、記憶の継承をめぐるさまざまな困難さがあることが浮き彫りになった。マスメディアと歴史表象のあり方については、今後ますます問われていくべき点であると言えるだろう。近い将来、第二次世界大戦の経験者がいなくなったとき、未経験者が何を記憶し何を忘却していくか、そして満洲の歴史がどのようにナショナル・ヒストリーとして捉えられていくのか、引き続き注意深く検討されていくべき大きな課題である。

竹田氏もまた、記憶と継承について言及している。例えば報告の5-2で指摘されているように、北朝鮮に「帰国」した親族が下の世代に日本語を教えることで、日本に暮らす親族とコミュニケーションが取れるようにしていたという事例は、親族ネットワークを介して日本語が継承されていることを物語っている。山崎氏も指摘しているような世代間の言語ギャップが記憶・継承に支障をきたす要因になる一方で、逆に日本語教育が世代間コミュニケーションの機会にもなっているという両義性は興味深い。戦後日本社会では、日本から帰国した人々についてはほとんど知られておらず、その歴史は記憶されてこなかった。日本と朝鮮半島に架橋する親族ネットワークに注目する竹田氏の研究は、東アジアの歴史と記憶を紐解く上で極めて重要な成果である。

山崎氏と竹田氏の研究は、長い時間をかけて聞き取り調査を実施し、個人や家族の歴史を丹念に記述することで、帝国崩壊後の人々の移動の歴史を明らかにしてきた。これらは日本と東アジアの和解を考える手がかりにもなるだろう。戦争や侵略をめぐる認識において日本と東アジア諸国との間には未だ大きな溝があり、それは東アジア地域の安定を妨げる要素であり続けてきた。両氏の研究実践が、日本史のみならず東アジア史の再解釈につながり、日本と東アジア諸国との和解への糸口になると期待している。

参考文献

竹内好 (1980), 『竹内好全集』筑摩書房, 4, 416